

合気道修練者藤平光一の静動一致論について

片山俊宏
(広島大学大学院)

本発表では合気道修練者藤平光一（一九二〇—二〇一一）の静動一致論に着目しながら彼の合気道論の一端を解明する。藤平は開祖植芝盛平（一八八三—一九六九）の弟子であり、第二次世界大戦後の合気道を牽引してきた代表的人物のひとりである（1）。植芝の合気道を継承しつつ、その体系化と理論化をおしすすめ（2）、「心身統一合気道」（3）を立ち上げた。

先行研究では、この藤平流「合気道の基本となるものとして心身統一の四大原則（1. 臍下の一点に心を沈め統一する。2. 全身の力を完全に抜く。3. 身体の総べての部分の重みをその最下部に置く。4. 気（ママ）を出す）」（4）が紹介されており、ここに「藤平の合気道の特色」（5）が認められるという。

しかし、文言だけでは理解困難なこの四大原則の解説はほとんどされてこなかった。そもそもこの原則は「静動一致という事は当たり前のことなのである。その為にこそ、私は心身統一の四大原則を確立した」（6）と藤平自身述べているように、静動一致の達成に向けて定められたものであった。藤平のいう静動一致とは「静は動の極致である」（7）とあるように、静止そのものを動の極致ととらえかえす静動一元論である。

先に紹介した四大原則とは「重みは下」（8）という「天地の理」（9）に従って「動中の静を保って、呼吸を乱さない様に（略）全精神を臍下の一点に集中」（10）させ、「盤石の不動体」（11）を心身に構築する静止主義的アプローチを指していたことがわかりつつある。

藤平は、この静止主義的アプローチを視覚的印象のまま停止とみなさないよう戒めている。「機に臨み変に感じて、電光石火の如く動ける動の極致」（12）に至り、合気道が完成すると考えていたからである。そして、この境地が四大原則の最後に挙げられている「「気」を出す」に相当することがわかってきている。

藤平の言う「気」とは「無限に小なるものの無限の集り」（13）であり、これを「総称して、天地といい」（14）、「宇宙エネルギーに外ならない（略）無限の力」（15）であるという。静止の「心身統一をしてこそ無限の力も湧き、（略）冰山全部の力を使うことが出来る」（16）と述べている。

つまり藤平にとって心身の静止は天地の運動を身体に表出させる過程ととらえかえされていたことがわかりつつある。では静止を通して表出される天地の運動とはどのような様態なのか。そ

れがどのようなかたちで合気道に活かされると考えていたのか。

本発表では、以上を踏まえ、藤平の静動一致論を明らかにしながら、四大原則を解説し、藤平流合気道論の一端を解明する。藤平の身体観や「気」の思想にも分け入る。一連の調査は、静止を完成された秩序ととらえかえし、動の表現性を認めようとする藤平の感性に迫る試みでもある。

調査方法については文献調査を行う。藤平自身が著した『生活の中の合気道』（一九六四）や『月刊カレント』（一九六四～）への寄稿「静動一致」（一九九七）などを参考に考察する。

- (1) 合気道を牽引してきた代表的人物として、植芝の弟子である富木謙治（一九〇〇—一九七九）、塩田剛三（一九一五—一九九四）、植芝吉祥丸（一九二一—一九九九）らが挙げられる。（工藤龍太『近代武道・合気道の形成—「合気」の技術と思想—』、二〇一五年、早稲田大学出版部、七頁）
- (2) 植芝は「組織等の統一等の問題に関心がなく（略）合気道の技術について体系的に説明することをせず神秘的かつ抽象的な説明も多かった」（工藤龍太、二〇一五、前掲書、七頁）ようである。
- (3) 田中守、藤堂良明、東憲一、村田直樹『武道を知る』（二〇〇〇年、不昧堂出版、九二頁）
- (4) 工藤龍太、前掲書、二〇一五年、三五〇頁
- (5) 工藤龍太、前掲書、二〇一五年、三五〇頁
- (6) 藤平光一、「静動一致」（『月刊カレント』三四（一）、一九九七年、潮流社、七六頁）
- (7) 藤平光一、前掲書、一九九七年、潮流社、七五頁
- (8) 藤平光一、「重みは下」（『月刊カレント』三七（八）、二〇〇〇年、潮流社、六一頁）
- (9) 藤平光一、前掲書、二〇〇〇年、潮流社、六一頁
- (10) 藤平光一、『生活の中の合気道』、一九六四年、六芸書房、一九〇頁
- (11) 藤平光一、前掲書、一九九七年、七八頁
- (12) 藤平光一、「中庸」（『月刊カレント三四（一二）』一九九七年、潮流社、七二頁）
- (13) 藤平光一、「気と姿勢」（『月刊カレント三三（七）』一九九六年、潮流社、七五頁）
- (14) 藤平光一、前掲書、一九九六年、潮流社、七五頁
- (15) 藤平光一、「心身一如」（『月刊カレント三二（八）』、一九九五年、潮流社、七七頁）
- (16) 藤平光一、前掲書、一九九五年、潮流社、七七頁